URAWA RED DIAMONDS YOUTH & JUNIOR YOUTH TEAM OFFICIAL REPORT

Little Diamonds

No. 22

●2007年1月31日●
発行：浦和レッドダイヤモンズ

それぞれの目標を持った2007年が始まる

底上げができた2006年の成果を今季示す

浦和レッズ・アカデミーセンターセンター長 村松　浩

◆2006シーズンは、大会の結果としては、ジュニアユースがクラブユース選手権でベスト4に進みましたが、全体としては芳しいものが出せませんでした。しかしそれはあくまでも大会の結果であって、最大の目的である個人の成長は図れたと思います。

ジュニアユースの中3の選手たちは、ユースに上がる選手も上がらない選手も、春先に比べて精神的にも肉体的にも成長したと思いますし、ユースに関しては、残念ながらトップチームに昇格する選手はいませんでしたが、J2のクラブに入ったり、大学や社会人など遠回りでもプロに向けた入口に進んで行ったということでは、まずまずの1年だったかなと思います。

昨年は、ユースの主力選手がサテライトの試合に出場することが多く、ユースチームが公式戦で勝つということに関しては、それがマイナス要因になった場合もありますが、上でやれるチャンスがあればできるだけそれを追求するというクラブの方針を実践できたので、選手個人に関してはプラスになったと思います。また同様に、ジュニアユースの選手がユースの大会に合流したこともありますが、そういう場合にチームの戦力が落ちたと見るのではなく、その選手がユースで十分やれることが検証できたことをプラスに考えています。

こういう形で何人かの選手が上のカテゴリーで活動することによって、違う選手に出場機会が与えられますから、底上げという部分でも成果があったと思います。

2007シーズンは、そういう個々の成長やチームの底上げという成果が、大会の結果である程度示すことができるのではないかと思っています。また、ジュニアユースに素質のある新中学1年生が入ってきますので、2年生、3年生にとっても良い刺激になるでしょう。

レッズはトップチームが昨シーズンリーグ優勝を始め二冠を果たしました。今後はいかにこのチーム力と成績を維持していくかということが大きな課題になってきますが、年齢構成を見ても、あと2～3年のうちには新しい選手が核になっていかなければならないでしょう。その選手がレッズユースから1人でも多く出るように、今シーズンも活動していきます。

周りに何かを与えることを意識して

ユース監督 堀　孝史

◆昨年のユースは全国大会に一度も出場できず、トップチームに1人も昇格させることができなかったという点では不本意でした。個人の成長という点では、頑張る選手を多く作ることができたかな、と思います。また1年生、2年生が公式戦に出場することが多かったですから、勝敗ということでは結果につながらなくても、今年や来年に生きてくるところがあると思います。

今季から監督を務めることになりました。過去2年間コーチとして自分がやってきたことと変わることはありませんが、望月コーチ、井嶋コーチとは初めて一緒にやっていくのでみんなで良いものを作り上げていきたいと思います。

選手にも話しましたが、サッカーでも集団で生活していくときでも、自分が周りに何かを与えられるようにしてほしい、と思います。試合に勝つことで見ている人に喜びを与える、プレーで感動を与える。生活で言うと、自分で進んで何かをやることによって周りに良い印象を与えるとか。人間は往々にして、与えられることを待つものですが、自分から周りに何かを与えるということをみんなが意識することによって、良いものができるんじゃないか、と思います。

高いレベルで試合をするために、大会で一つでも上に進むという目標はいつも通りです。今年は夏にU－17の世界大会がありますから、そこに代表として出て行く選手がいるでしょうし、サテライトリーグに出場する機会もあるでしょう。特にサテライト担当のコーチになった広瀬さんはユースの選手を良く知ってくれていますから、積極的に引き上げてほしいと思います。ユースの大会のスケジュールと重なることもあるでしょうが、プライオリティーはサテライトにおいています。大会は、そのときにいる選手で頑張っていきます。

また名取監督とも話しながら、ジュニアユースの選手をユースに呼ぶ場も作れればと思います。これはユースの選手にとっても良い機会で、1～2歳下の選手と一緒にやったときに、どういうことを彼らにやらせてあげられるか、どういうリーダーシップを発揮できるか、という経験になります。

今季、環境で大きく変わることはないですが、昨年アウェイで力を発揮できなかった試合が多かったので、県外に出ていく試合や、大学生との試合など、やや厳しい環境での練習試合を取り入れていければと思っています。

今季の下部組織の指導体制

統括責任者	村松　浩
総務担当	児玉賢太郎
ユース	
監督	堀　孝史
コーチ	望月　聡
GKコーチ（ジュニアユース兼任）	井嶋正樹
トレーナー	藤家　薫
ジュニアユース	
監督	名取　篤
コーチ	淀川知治
コーチ	池田伸康
トレーナー	安齋健太郎

大会で上に行くことに妥協はしない

ジュニアユース監督 名取　篤

◆昨年のジュニアユースは、最後に高円宮杯の全国大会に連れていけなかったですから、本当はまだまだ選手たちを伸ばす余地があったと思っています。あれが限界だったとは思っていませんから、自分としても非常に残念です。

ジュニアユースの目標は、トップに上がる可能性のある選手を数多くユースに上げるということですが、そのためにも多くの大会に出ていろいろなタイプの選手と対戦し、高いレベルで試合をするというのは大事なことだと思っています。ですから今年もそこでは妥協しません。

今年からU－15関東リーグが始まり、埼玉県からは過去5年間の成績によりレッズとアルディージャが出場します。前期は12チームが6チームずつ2グループに分かれてリーグ戦をやり、後期は上位6チームと下位6チームに分かれてまたリーグ戦です。これにより、クラブユースと高円宮杯には関東予選から出場することになります。このU－15リーグで、柏や横浜M、F東京、東京Vら関東のJリーグの下部組織との対戦が増えるでしょうから、それは良い機会です。しかしトーナメント方式ではないし、全国大会の予選という位置づけではないので、試合に臨むモチベーションを自分で維持していかないといけません。緊張感を持ってやりたいと思います。

中学3年生はこれから受験の選手もいると思いますが、コンディションに気をつけて、ユースに上がる選手も上がらない選手も新しいチームで頑張ってほしいです。

俺のレッズユース、俺の進む道

金生谷仁（J２リーグ・ザスパ草津へ）
鈴木竜基（関東リーグ・ルミノッソ狭山へ）

2007年春、浦和レッズユースを卒業する選手たちの中で、社会人になる２人、金生谷仁と鈴木竜基。

金生谷はＪリーグ２部のザスパ草津に新加入し、Ｊリーガーとしてのスタートを切る。鈴木は関東社会人リーグ１部の本田ルミノッソ狭山に加入し、本田技研狭山工場で働きながらプレーする。

現在、Ｊリーグ、あるいはJFL、関東リーグなどで活躍するレッズユース出身選手は少なくないが、すべて大学あるいはレッズのトップチームを経て現在に至っている。金生谷、鈴木の２人のようにユースから直接、レッズ以外のプロまたはトップレベルの社会人チームに進む例は初めてだ。

クラブは2002年から、ユース、ジュニアユースの下部組織を「レッズのトップチームで活躍するプロ選手を育成する場」と位置づけを強めてきたが、残念ながらレッズには昇格できなくても、他のＪクラブや社会人チームにプロあるいはアマチュアで進む道も開いてきた。２人はその第一号となる。

すでに新天地での歩みを始めた仁、その準備に余念がない竜基。２人にレッズでの思い出とこれからの抱負を語ってもらった。

（取材・１月５日）

金生谷　仁（かなおや・じん）
1988年5月29日、東京生まれ。幼稚園のときに上尾市に転居し、上尾朝日FCサッカー少年団からレッズジュニアユースに。主に守備的MFとして活躍。ユース３年生のときにはキャプテンを務めた。

鈴木竜基（すずき・りゅうき）
1988年6月11日、東京生まれ。幼稚園のときに所沢市に転居し、柳瀬レッドローズジュニアからレッズジュニアユースに。FWとして活躍。３年生のJユースカップでも最後まで出場を続け、ほぼ毎試合得点を挙げた。

■ 本田ルミノッソ狭山 ■

本田技研狭山工場のサッカー部。2003年に、より地域に根ざしたチームを目指して現在のチーム名に改称。プロ志向ではなく、企業チームとして選手たちは通常の勤務をこなして練習に励む。関東社会人リーグ優勝４回（2006年は２位）、全国社会人選手権優勝３回の強豪チーム。

■ ザスパ草津 ■

群馬県リーグ４部の「リエゾン草津」から徐々に昇格を続け、2005年からＪリーグ２部に昇格した。草津温泉をホームタウンとした地域密着度の高いクラブ。

上下関係なくサッカーに集中できるクラブチーム

★中学生になるときにレッズジュニアユースを選んだ理由は?

◆仁　小学６年生のときに、上尾朝日のジュニアユースチームとレッズジュニアユースの試合を見て、母親がすごく感動したのがきっかけです。当時の中学２年生で、大山俊輔先輩（レッズから愛媛FCにレンタル中）や中村祐也先輩（レッズ在籍中）が出ていました。それと小学生時代に関東トレセンで一緒だった田中宏育と仲が良かったので、一緒にレッズに行ければいいね、と言っていました。

◆竜基　地元の中学校のサッカー部があまり強くなかったので、親にも勧められてクラブチームをいくつか受けました。レッズも親が勝手に申し込んでいたんです（笑）。他のクラブからも誘いはあったんですがレッズの発表を待ってもらっていました。レッズって発表遅いんですよね（笑）。

★２人の世代は、ジュニアユースから全員ユースに上がれる最後の世代です。高校生になるときには迷わずレッズユースでしたか?

◆仁　高校サッカーも考えました。高校サッカーはいろんな人に見てもらえるじゃないですか。でも、レッズのトップに上がれなくても他のＪリーグのクラブに行く道もあると聞いて、決めました。

◆竜基　僕もそうです。プロになりたかったので、レッズのトップに上がれれば一番いいですが、ダメなときに他にもいけると聞いてユースに進みました。

★高校のサッカー部にいった友人の話も聞くでしょうし、自分の高校のサッカー部の活動なども見たと思いますが、クラブチームの良さは何だと思いますか。

◆仁　高校サッカーは上下関係が厳しいと思うんですが、クラブチームはそれがなくて、コミュニケーションも取りやすいし、試合をする上で、上下関係に気をつかわずに思い切りサッカーに集中できるのが良かったです。それと、蹴るサッカーとつなぐサッカーでは、つなぐほうが好きなんですが、今は高校でもつなぐところが出てきていますけど、やはりその点でもクラブの方がいいです。

それとクラブは練習環境がいいです。ボールも用意されているし、ドリンクも自分たちで作ればいい。部費もかかりませんし。

◆竜基　高校のサッカー部は、ウエアから何から全部自分で買わないといけないですが、ユースだといろいろ貸してもらえてお金もあまりかからず、親も助かったと思います。自分の高校のサッカー部を見ていると、人数が多くて練習が窮屈そうだったし、１年生が昼休みにご飯食べる時間も削ってグラウンド整備してたり、雨が降るとグチャグチャになったりして大変だなあと思ってました。

★２人ともユースでは１年生から試合に出ていましたが、思い出を聞かせてください。

◆仁　１年生のときのクラブユース選手権でＪヴィレッジに行ったとき、一番自分が成長したと思います。１年生なのでがむしゃらにやっていたからかもしれませんが、先輩たちがサポートしてくれて、伸び伸びやれました。

◆竜基　僕の思い出は、１年生の夏休みにドイツ留学したことです。向こうの選手と一緒にやって自信がついたし、帰ってきてから試合にも出られるようになりました。あれが自分の中での転機だと思います。

★サテライトの練習にもよく参加していましたよね。

▲１年生でクラブユース選手権に先発出場した金生谷（2004年クラブユースU－18・広島戦）

◆仁　１年のときから行かせてもらいました。最初は人数も少なかったこともあって、自分でも結構やれた気がしたんですが、トップの選手がサテライトに来たときにはすごいな、と感じました。赤星さんや細貝さんがいろいろ教えてくれて、サテライトでできなかったことをユースに帰ったときにやろうと意識して練習していました。それが実際に発揮できたかどうかはわかりまんが、そこで学んだことはプラスになりました。感謝してます。
◆竜基　僕は１年のとき初めて行ったときは違う世界でした。何でこんなところに自分がいるんだろ、みたいな。でも、だんだん慣れてきました。そういう高いところで練習したから、ユースで点も取れるようになったのかな、と思います。
◆仁　僕は１年生のとき、学校で先輩に目を付けられて殴られたときにやり返したことがあるんです。正当防衛みたいなもので親は何も怒らなかったんですが、柱谷（哲二）コーチ（当時サテライト担当）からは「試合中に何かされたからといってやり返したら退場食らうだろ。今度やったらもうサテライトには呼ばない」と言われました。それはすごく刺激になりました。

▲鈴木は１年生のときから点取り屋として期待された（2004 年Ｊユースカップ準決勝・鹿島戦）

何とかプリンスリーグ残留を決めたジェフ千葉戦

★金生谷選手は３年生のときキャプテンでした。
◆竜基　仁は、チームをまとめる力もあるし、責任感も強いからキャプテンとしてふさわしかったですが、責任感が強すぎて、試合中、周りのことを気にして自分のプレーができてなかったりして気の毒だなと思いました。１年生のときは伸び伸びやってたのに、かわいそうだなと。
◆仁　たしかにそれはあるかも。自分はそんなに目立とうとか思っていないし、チームがまとまればいいと思ってましたから。中学生のころやトレセンではスルーパスばっかり狙ってたんですけど、ユースでは自分よりチームを考えるようになりました。チームのために何かができればいいと。キャプテンになったからじゃないと思いますが。
◆竜基　トレセンとかでは仁がスルーパス狙うんですよ。だから仁が持ったときに走ればパスが出てくるんです。でもユースだと、見えないところで仕事してくれる選手が他にいなかったのかも。
★去年の７月、プリンスリーグの次年度残留がかかった順位決定戦で、ジェフユースに勝ちました。ロスタイムに鈴木選手が決勝ゴールを挙げましたが、金生谷選手が飛んでいって２人でしっかり抱き合っていました。
◆竜基　自分たちのせいで来年のプリンスリーグに出られないかもしれないということで、何とか残留だけは決めたいと思ってました。
◆仁　自分たちが全国大会に出られないのはともかく、後輩にだけは迷惑をかけられないから、ホッとしましたね。
★鈴木選手は、ほとんどの３年生が公式戦から外れるＪユースサハラカップでも、出場してほとんどの試合で得点していましたね。
◆竜基　対戦したチームがほとんど去年、思い出のあるチームだったんですよ。ヴェルディはクラブユース関東予選の最後でＰＫ負けしたところですし、プリンスリーグでＦ東京に負けてから崩れていった気

▲2006 プリンスリーグ順位決定戦で決勝ゴールを挙げた鈴木を迎える金生谷。これで関東 12 位以上を確保し、2007 リーグの参加が決まった（7.15 ／千葉ユース戦）

がするし、マリノスにはプリンスの最終戦で負けて高円宮杯がなくなりました。だから絶対に勝ちたかったんです。勝つには点を取るしかないし、みんなも自分にパスを出してくれたから点を取れたと思います。
◆仁　僕は１試合だけ出ました。自動車免許を取るのがこの時期だけだったんです。夏に取っていれば良かったんですが、夏にはまだ進路が決まっていなかったので、まず進路が決まるまでは、と思ってました。

プロでも実業団でも、レッズ以外の道も悪くない

★３年生になって進路のことで悩んだと思いますが。
◆仁　２年生までは自分のこととチームのことで精いっぱいだったですが、３年生になってトップを見るとだいぶ強いチームになっていて、これは昇格できる確率が減るかな、と複雑な気持ちでした。
◆竜基　２年生の終わりごろから意識し始めて、これじゃ上がれないかな、という気持ちもありました。ジュニアユースに入ったときは、ちょうどレッズがＪ2 からＪ1 に上がったころだったので、そうは思わなかったんですが（笑）。
★以前のレッズなら２人はトップに昇格していたかもしれません。しかし今は選手層も相当厚くなっていますから、そこに割って入るのは大変だと思います。残念ながらレッズで昇格することはなくなりました。しかし高校卒業後、すぐにサッカーで身を立てる道を２人とも選びました。
◆仁　レッズに入るのが一番の目標でしたけど、それができなくなったときに他のクラブに行くというのは悪いことじゃないと思います。大学に行くのもいいと思いますが、プロになるのが夢だったので、別のクラブでプロになる道を考えました。そういうことも視野に入れて後輩のみんなも頑張ってほしいです。
　早くお金も稼ぎたかったですしね。大学に行って親にこれ以上迷惑をかけたくない、というのもありました。それはたぶん竜基とも共通してます。

▲2006 シーズン二冠を達成したレッズ。選手層も厚い

◆竜基　そうですね。うちの親と仁の親は仲が良いので、そういう話をしてたかも。

自分もプロになりたかったですが、Jのクラブを受けて落ちたので、実業団を選びました。プロではないですが、仕事をしながらサッカーをしてお金をもらうという点では同じだと思います。会社で働かなくてはいけませんが、それも悪くはないですよ。それにまだプロの道が終わった訳じゃないと思ってます。プロに入ったら入ったで1年目は試合に出られなくて体力とかが落ちるかもしれない。それよりも実業団で試合に出た方が自分のためでもあります。プロのクラブからプレーを見てもらえるということもあるでしょう。仕事との両立は厳しいかもしれませんが、それでもいいと思いました。

この旗が元気をくれた

サポーターの応援のおかげで頑張れたときも

▲公式戦にはいつもレッズサポーターの応援があった

★レッズの指導者の思い出は何ですか。

◆仁　スタッフにはみんなに感謝してます。僕はヒロさん（広瀬治・前ユース監督）のことは師匠と思ってるんですが、3年生のときに8番をつけてたのもそれがあります。それと澤村さん（元GKコーチ）。私生活でいろいろ言われましたが、そのときは「何だよ」と思ったんですけど、今は自分のためになっています。人間として最低限のことを教えてもらいました。

◆竜基　自分もそうですね。澤村さんには、チームのために何ができるか、個人競技じゃないからチームの中の一人ということを考えるように言われましたが、これはこの先社会人になっても同じことだと思います。

それと淀川さんが、ジュニアユースの監督だったとき、中1だった自分をクラブユースの全国大会に呼んでくれて、全国優勝を経験させてもらいました。そのときから、自分が点を取らないといけないと思うようになりました。

◆仁　児玉（賢太郎＝総務担当）さんには、ヒロさんやホリさん（堀孝史現監督）に言えないことをいろいろ聞いてもらいました。

◆竜基　試合のときは、児玉さんが一番熱いんですよね（笑）。児玉さんがベンチでガッツポーズをしてるのを見ると、「やったな」という気になりました。

★レッズサポーターも熱く応援してくれたと思います。

◆仁　すっごく力になりましたね。今年は全国大会に行けなかったですけど、クラブユース予選最後のヴェルディ戦の前には、あの人たちのために、という訳じゃないですけれど、どうにしかして一緒にJヴィレッジで一緒に闘いたいと思ってました。だけど自分がPKを外して負けたので申し訳なくて。

あの人たちがいたから、試合中負けそうになっても頑張れたし、あきらめるということがなかったです。応援してくれる人のために頑張る、という気持ちになったのはユースになってからですね。

◆竜基　勝ったときは一緒に喜んでくれますし、負けたときは「次だ、次」と励ましてくれました。アウェイにも来てくれて、一緒に闘ってるな、と思いました。Jユースの最後の試合（鹿島戦）で負けて、自分がこれで最後になったときも近くまで来てくれて声をかけてくれて、すごくありがたかったです。

いつかまた2人でやれたら。もちろんレッズで

★最後にお互いに一言ずつお願いします。

◆仁　竜基はすごく頼れる存在でした。何かあったら、こいつにパスを出せばやってくれる。特長もわかってるし、一番やりやすい選手でした。

6年間やってきましたけど、いつか2人ともレッズに帰ってきて一緒にプレーできれば、とも思ってます。

◆竜基　仁の良いところは、周りを常に見られることで、自分が近くに来てほしいときにいつも来てくれていました。チームにいなければいけない選手です。これからプロの厳しい世界でやることになりますが、ユースでやってきた元気とか気持ちの入ったプレーをしていれば試合にも出られると思います。早くその姿を見たいですし、自分もいつか仁と同じ舞台に立てるように頑張ります。

▲ユース卒業後の健闘を誓い合う2人

浦和レッドダイヤモンズユース・ジュニアユース公式リポート　リトルダイヤモンズ　第22号　2007年1月31日
発行　浦和レッドダイヤモンズ　〒336-8505 さいたま市緑区中野田500　TEL048－812－1001　編集協力／清風庵　写真／清尾　淳・加藤澄人